

## 近世中期・名古屋東照宮祭礼の装束

— 常盤町・小袖型装束再現の試み —

沖本 清美\*・扇澤美千子\*\*

### 1. はじめに

#### 1-1 再現を試みるに至った経緯

江戸時代の祭礼装束については、久留島浩が都市の民衆の祭りへの関わり方に町の構造が反映されているのではないかとという観点から近世の都市祭礼を検討した論考で、祭礼行列に参加した道具持ちや山車を曳く人が揃いの装束を着た事例に触れた研究<sup>1</sup>および、福原敏男が惣町祭礼の視点から幕末の津八幡宮の祭礼を対象とした論考の中で、『八幡御祭礼之次第』（三重県立図書館蔵）に記された装束について、出し物の構成や主題の解釈とともに見解を示した研究<sup>2</sup>などがある。また、近年では、2012年秋に国立歴史民俗博物館で開催された企画展示「行列にみる近世」において、岩崎均史が江戸天下祭図屏風に対して「服装の異様さ、（凝りよう）も特徴的」と指摘し、江戸における祭礼史・風俗史などの研究資料として同屏風の重要性を説いた研究<sup>3</sup>、福原が山王祭の出し物を解説する中で、装束を祭礼番附に基づいて紹介した研究<sup>4</sup>などがあり、近世の祭礼では武士や異国人、生活に身近なものなどへの仮装が行われたことが、様々な祭礼を例に示されている<sup>5</sup>。しかし、これらの先行研究では、近世の都市祭礼の解明や出し物の特色、絵画資料などの資料的位置づけが考察の主な対象となっており、装束自体の詳細な検討はなされていない。

一方、異国風の祭礼装束については、福原が17世紀後半の津八幡宮祭礼に焦点を当てた論考で「祭礼の唐人」の装束について検討し<sup>6</sup>、ロナルド・トビが異国人を示す絵画的な約束事との関連で論じる<sup>7</sup>など、祭礼および絵画などに表現された異人表象との関わりから、その装束の特徴や典拠の研究がなされた例が見られた。

このように、祭礼装束についての先行研究では、異国風の装束に比べて異国的な印象を特に与えない装束については、出し物の解説や史料紹介の一部として記述されるに留まっている場合が多く、実態に則した装束の解明はあまり進められていないように思われる。

筆者が以前、名古屋東照宮祭礼の祭礼装束について、近世後期の茶屋町で着用された「唐人」装束を中心に検討を行った際<sup>8</sup>、「唐人」装束は形態の非日常性が高く、目立ちやすい祭礼装束ではあったが、祭礼装束の多くは近世の日常的な衣服である小袖型をしていたことが、祭礼を描いた絵画資料<sup>9</sup>から読み取ることができた。そこで、本論では、小袖型の祭礼装束に視点を移し、名古屋東照宮祭礼の行列を記した「御祭礼行列」を史料として、従来あまり注目されてこなかった練物従者の小袖型装束の再現を試み、装束自体の詳細な検

\*お茶の水女子大学博士後期課程

\*\*茨城キリスト教大学

討を行った。

なお、本論では、「小袖」の語を長崎巖による小袖の定義のうち「肩山を跨いで体の前後に連なる身頃と袖を持ち、さらに前身に襟と衽を加えた垂領式の衣服」で、「近世においては、庶民の労働着を別にすれば、一般に袂のある袖を持ち、裏なし、裏付き、あるいは綿入れいずれかの状態に仕立て」られたものを指す、広義の意味<sup>10</sup>で用いる。

## 1-2 史料

「御祭礼行列」1冊（名古屋市蓬左文庫蔵 請求番号：中-235）は、名古屋東照宮祭礼の行列を記した史料である。執筆者、年代は不明ながら、各町の練物の装束の特徴を書き留めた点に特色があり、祭礼装束を検討する上で重要な史料であると考えられる。筆者は、年代の判明している名古屋東照宮祭礼の祭礼記、行列記、絵画資料などを基に、各練物の実施状況から、当該史料の内容年代の推定を試み、また、練物従者の装束に焦点を当て、その全体的な傾向と役割について考察した<sup>11</sup>。内容年代は、おおよ享保18（1733）年から元文3（1738）年までと推定することができた。練物従者とは、付随的な役柄で練物に参加する人を指し、祭礼の練物行列を構成する要素のひとつであって、具体的には、床几持、羽織着、杖突などと呼ばれた役柄の人である。

「御祭礼行列」は、祭礼行列の主な登場人物、練物の役柄ごとに㊦㊧㊨順に記号が振られ、精粗の差はあるが、役柄ごとに装束の色彩、素材、服飾の名称、模様などが記され、持ち道具についての記載があるものもある。しかし、服飾の名称は「衣服」と記述された場合が多く、形態を推測することは困難であった。

そこで、主に形態把握の観点から「御祭礼行列」の装束記述を補完するため、「張州雑志」<sup>12</sup>に描かれた装束を参照した。「張州雑志」の景観年代は、宝暦6（1756）年に登場した宮町の唐子遊車と、宝暦13（1763）年に指南車に替わった淀町・伏見町の中巻持練物が描かれている<sup>13</sup>ことから、宝暦6年～宝暦12年と推定される。「張州雑志」の景観年代は、「御祭礼行列」の内容より20年ほど後であるが、登場する山車、練物の多くは一致しており、参考資料として適切であると考えた。

## 2. 製作作品の選定とその特徴

### 2-1 製作作品の選定

本論の目的は、小袖型の祭礼装束の中から練物従者の装束に着目し、縮小したサイズで再現製作を行って着装時の姿をイメージした装束展示への展開の可能性を示すことである。

まず、製作対象を選定するに当たって、練物従者の中でも人数が多い「床几持」に着目した。床几持は、主な役柄1人につき1人ずつ配置されていることが多いため、役割としては付随的だが数による存在感は大きかったと考えられるためである。表1に各練物の床几持装束に関する記載事項を示す。伏見町、淀町、両替町を除く全ての練物で床几持装束の記載が見られる。

次に、色彩に注目し、「御祭礼行列」床几持装束に用いられた色名の出現数を図1に示す。色名は、史料の表記に関わらず同様の色を表すと考えられるものは統一表記とした。史料

表1 「御祭礼行列」記載 床几持の装束

番号	町名	練物	地色*1	素材	服飾の 名称	意匠	
						紋	装束の模様
①	小桜町 上長者町	雑職	黒柿		衣服	■の古文字	袖口に鋸歯模様
②	福井町 富田町	小母衣	黒		衣服	富の古文字 福の角字	
③	長嶋町	頼光	柿 浅黄 柿 浅黄		衣服 衣服	紋（詳細なし）	竪嶋 竪嶋
④	上御園町 中御園町	長カ刀ナ	黒		衣服	石持の内、園の角字	
⑤	伏見町	中巻				なし	
⑥	淀町	中巻				なし	
⑦	大和町	唐人	赤色小紋	木綿	衣服 袴 笠		小紋 嶋
⑧	茶屋町	唐人	赤色小紋 赤小紋	木綿 木綿	衣服 衣服		小紋 小紋
⑨	伊勢町	伊勢参	薄柿小紋		衣服		小紋
⑩	呉服町	虚無僧	白茶		衣服	服の古文字	裾に分銅に万両と書付
⑪	常盤町	虚無僧	緋 白 黒 柿色 染め分け		衣服	常の角字	裾に松皮菱
⑫	諸町	鷹追	緋		衣服	石持の内、諸の角字	
⑬	桶屋町	茸狩	柿小紋		衣服	桶の角字	小紋
⑭	西鍛冶町	茸狩	紺		衣服		上 牡丹 下 切石
⑮	小牧町	しつこう	紺		衣服		立嶋
⑯	石町	鉄砲／唐犬・ 猪正／鹿狩	緋		衣服		光林形
⑰	吉田町	川狩	紺		衣服	祭の字	袖口に鋸歯模様 柿色
⑱	小市場町	川狩	白			蕪 花色上げ	
⑲	島田町	花擔／空也・ 鹿	黒唐茶小 紋 黒色		衣服	十字の内、嶋の古文 字	小紋
⑳	練屋町	比丘尼	薄柿 薄柿色	木綿	衣服 衣服	半車 紺 半車	裾模様 霙菱
㉑	上七間町	寿老人／唐子	鳶色	木綿	衣服 衣服		しゃむろ染 しゃむろ染小紋
㉒	上島町 五条町	順礼	黒	木綿	衣服	石持に畠の字	
㉓	和泉町 (年々順に)	順礼	上, 黒か 下, 柿	木綿	衣服	丸に泉の字	
㉔	関鍛冶町	山伏	紺 花色	木綿	衣服 衣服	関の字 関	
㉕	益屋町	(消去)				なし	
㉖	大津町	汐汲	上, 浅黄 下, 柿小紋		衣服	戴か	
㉗	瀬戸物町	汐汲	浅黄 柿小紋		衣服	戴か	小紋
㉘	両替町	聖				なし	

番号は、記載順に付けたものである。■は判読困難な文字である。

\*1 小紋は遠目には無地のように見えるため、地色に準ずると見なした。

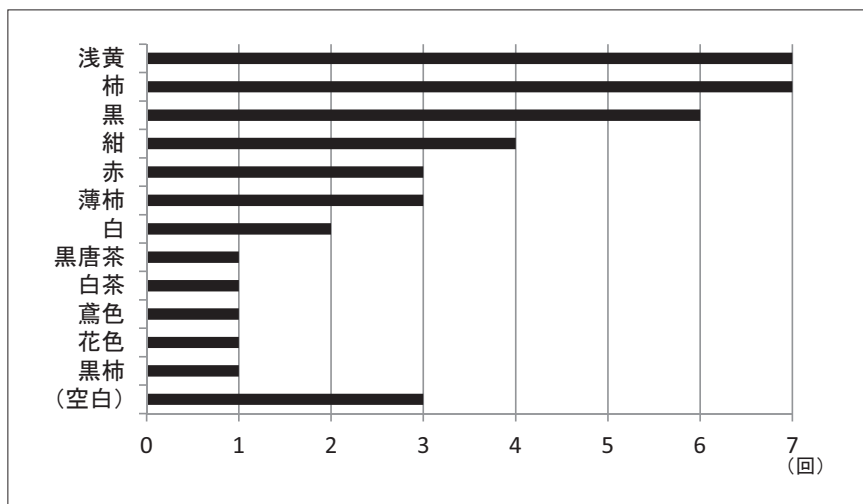


図1 「御祭礼行列」床几持の装束に見られる色名の出現数（色名を冠した小紋を含む）

には、色名を冠した小紋の記述が見られるが、小紋柄は遠目には無地のように見えるため、小紋の直前に付けられた色名を含めて、床几持装束を彩った色彩として検討した。グラフより、床几持装束では、浅黄、柿が最も多く用いられ、次いで黒が使用されていたことが分かる。

そこで、製作の対象は、床几持の装束に代表的な色彩と考えられる浅黄、柿、黒がひとつの装束に染め分けられた、常盤町・虚無僧の床几持装束を選定した。これにより、床几持装束に頻出する色彩を扱うことが可能であり、色彩の検討結果を複数の床几持装束に適用することができると考えた。

なお、常盤町は、呉服町の南、針屋町の北にあり、杉の町筋より南へ二丁、伝馬町筋までの間を指し、現在の名古屋市中区丸の内三丁目、錦三丁目に当たる<sup>14</sup>。

## 2-2 製作作品の特徴

### 2-2-1 再現製作対象について

史料1に、「御祭礼行列」に記された常盤町の部分を引用する。床几持の装束は、傍線部に説明されている。

(史料1)「御祭礼行列」

(※読点、傍線は筆者による。以下同じ。)

常盤町

⑤	若堂	鍮	⑥	拾人
町代		草履取 茶弁当	虚無僧	
	若堂	挟箱 袴着一人	拾人	

衣服、白綸子、袷姿懸、天蓋付、／各尺八持、腰ニも袋入着ス、各／風呂敷裏を帶ッ／先式人、尺八吹、衣モヘキ縮緬、／袷姿掛、天蓋付也／床几持各一人、衣服、緋、白、黒、／柿色、染わヶ、紋常の角字、裾ニ／松皮菱、杖突式人、羽織紋橘ノ角字

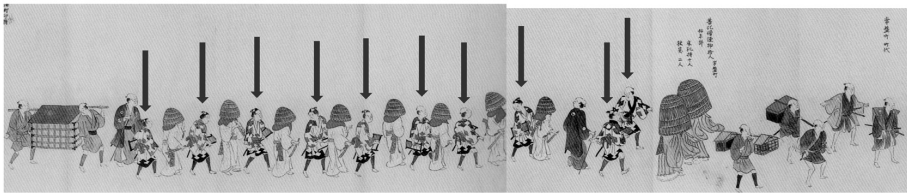


図2 常盤町・虚無僧（矢印が床几持）  
（図版出典：『張州雑誌』『新修名古屋市史資料編民俗』2009年5月所収）

これによると、常盤町・虚無僧の床几持装束は、浅葱色、白、黒、柿色に染め分けされた「衣服」であり、「常」の角字が紋として付けられ、裾には松皮菱の模様があしらわれていたことが読み取れる<sup>15</sup>。

次に、「張州雑誌」に描かれた当該の役柄を図2に示す。ここでは、笠を被らず、床几を持っている人物が床几持で、その装束は白地に肩と袖の上の部分が浅葱色、袖の下部と腰の辺りが柿色、裾に黒で、それぞれ松皮菱の模様が付けられていた。

つまり、「御祭礼行列」の記述からは、床几持装束は4色の染め分けで、裾にのみ松皮菱があしらわれたことが窺われ、「張州雑誌」の描写では、白地に3色の松皮菱が染められていたと考えられる。しかし、両者は色彩が一致している点、裾の松皮菱模様が共通している点から、同じ装束を表現していると思われる。

「御祭礼行列」に記載された常盤町の床几持装束は、素材については史料に明記されていない。しかし、他の練物の床几持の装束の記載事項（表1）より、素材について記されている練物では木綿が用いられていたことが読み取れるため、常盤町の場合も木綿と類推される。以下、形態、寸法、色彩、模様、紋について検討を加える。

### 2-2-2 形態

常盤町の床几持装束の形態は、「張州雑誌」の描写では、小袖型で膝下程度の短い丈に着装されている。薄茶色に見える帯を締め、脚絆を巻いている（図2）。

袖口は、袖下が縫われている装束（図3）が8人、袖口が縫われず大袖のようにになっているもの（図4）が2人描かれており、二種類の袖が混在しているが、多く描かれている袖口の小さい装束が本来の形態であったと推測される。

内揚げの位置、袖付けの人形の有無は、「張州雑誌」の描写から読み取することは困難と思われる。しかし、神谷栄子によると、元禄（1688～1704）頃になると小袖の形が現代の着物と基本的な点でほとんど変わらなくなり、着装の



図3 常盤町・床几持(図2拡大)  
袖下を縫われた装束



図4 常盤町・床几持(図2拡大)  
袖下を縫わない装束



図5 薄茶平絹地小桜模様小袖 江戸時代18世紀  
(画像提供：東京国立博物館)

根本もほとんど変わらない<sup>16</sup>ことが指摘されている。元禄頃の遺品として紹介されている「伝浅倉半蔵所用小桜小紋小袖」(東京国立博物館蔵, 図5)<sup>17</sup>(後述)は, 内揚げはあるが, 袖付は全て縫い留められており, 人形はない。今回の再現製作では, この形態をもとに, 内揚げがあつて, 人形のない形態と推定した。

また, 膝下程度の丈に描かれた装束は, 裾のラインがはっきりと出ていることから, 尻端折りをして裾をたくし上げているとは考え難い。また, 帯の辺りにある「柿色」の松皮菱模様が崩れていないため, お端折りはしていないと思われる。すなわち, 対象装束は, 初めから膝下丈に仕立てられたと推測される。

### 2-2-3 寸法

そこで, 身丈を除く各部の寸法は, 神谷による「伝浅倉半蔵所用小桜小紋小袖実測図」(図6)<sup>18</sup>に従って推定し, 計測値のない部位については, 薩本弥生(総括)『『きもの』文化の伝承と発信のための教育プログラム』<sup>19</sup>の標つけ寸法割り出し法に従って算出した。身丈については, 膝下丈にして再現するため, 以下の方法で推定を行った。推定方法は, 以下の2通りを試みた。

[推定膝下着丈A] 現代の人体計測値, 江戸時代の平均身長より算出(表2①②)

まず, 現代の人体計測値より膝下丈の寸法を算出した。現代の人体計測値は, 「AIST人体寸法データベース 1991-92」<sup>20</sup>より, 青年男子の頸椎高145.6cm, 外窩端高5.5cm, 膝蓋骨中央高45.8cmを用いた。[頸椎高-外窩端高]より踝までの小袖丈(140.2cm)を求め, [頸椎高-膝蓋骨中央高+5cm]から膝下丈の小袖丈(104.9cm)<sup>21</sup>を求める。再現対象の膝下丈の小袖は, 膝が隠れる程度の丈であることが図2~4より読み取れるため, 膝蓋骨中央高より5cm程度下がった辺りを膝下丈と推定した。その後, 膝下の長さを[頸椎高-膝下丈の小袖丈]より計算し(40.7cm), 膝下の平均身長に対する割合を求める。また, 膝下丈の小袖丈と踝までの小袖丈の割合を求めておく。現代青年男子の身長に対する膝下の長さの割合は約23.8%, 膝

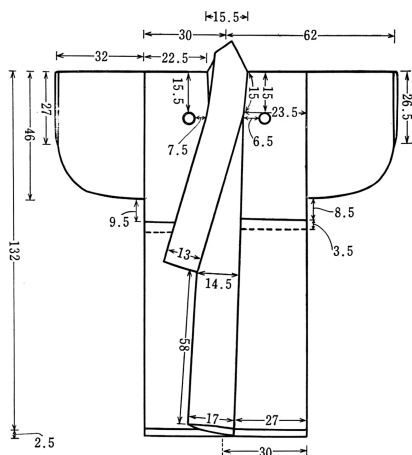


図6 「伝浅倉半蔵所用小桜小紋小袖実測図」  
(図版出典：神谷栄子『日本の美術67  
小袖』至文堂, 1971年12月, 第37図)



表2 膝下丈の小袖丈推定 (単位: 長さcm, 割合%)

部位	推定膝下丈A		推定膝下丈B
	①現代: 膝下丈の小袖寸法を現代の人体寸法をもとに計算	②江戸時代: 膝下丈の小袖寸法を現代の人体寸法をもとに計算	③江戸時代: 膝下丈の小袖寸法 吉宗所用の脚絆丈をもとに計算
平均身長	171.4	155.0	155.0
踝丈の小袖丈	140.2	132.0	132.0
膝下の長さ	40.7	36.9	32.0
膝下丈の小袖丈	104.9	95.1	100.0
膝下の長さ/平均身長	23.8%	23.8%	20.6%
膝下丈の小袖丈/踝丈の小袖丈	74.8%	72.0%	75.8%

出典①AIST人体寸法データベース 1991-92

②③神谷栄子『日本の美術67 小袖』至文堂, 1971年12月, 第34, 37図

平本嘉助「江戸時代人の身長と棺の大きさ」(『墓と埋葬と江戸時代』) 吉川弘文館, 2004年8月, 201~223頁

同「中世・近世人の身長と埋葬について」(『中近世史研究と考古学』) 岩田書院, 2002年8月, 205~230頁

③栗原澄子『被服史からみた御神宝装束の基礎的研究』ブレーン出版, 2001年4月, 237頁

下丈の小袖丈は, 踝までの小袖丈に対して約74.8%の長さであった(表2①)。

次に, 江戸時代男子の膝下の長さを, 江戸時代前期男子平均身長(平本嘉助の論考により155cm)<sup>22</sup>に現代人の膝下の長さの割合を掛け合わせることで概算し(36.9cm), 膝下丈の小袖丈を, 前述の元禄頃の小袖丈(神谷による小袖実測寸法身丈132cm)から江戸時代男子の膝下の長さ概算値を引くことで求める。江戸時代の平均身長から膝下丈の小袖丈を概算した結果, 丈は約95.1cm, 踝までの小袖丈に対して約72%の長さとなった(表2②)。

[推定膝下着丈B] 徳川吉宗所用の脚絆丈をもとに算出(表2③)

膝下丈の小袖丈を, 前述の元禄頃の小袖丈から徳川吉宗(1684~1751)所用の脚絆丈を引くことで求める。「八代吉宗所用御脚半勝色襦子」(図7, 図8)の丈は, 栗原澄子の久能山東照宮に伝来する衣服の調査より32cm<sup>23</sup>で, これを膝下から踝までの長さと考えた。なお, 吉宗所用の脚絆丈は, 平本が調査した一橋高校内遺跡<sup>24</sup>から出土した脛骨の長さとはほぼ等しいことから, 江戸時代男子の脛の長さの手がかりとして有用であると思われる。但し, 資料数が少ないため, 脛骨の長さと脚絆の丈の関係性についてはその可能性を述べるに留める<sup>25</sup>。

膝下丈の小袖丈は約100cmと推定され, 吉宗所用の脚絆丈をもとにした江戸時代男子の膝下の長さが平均身長に占める割合は約20.6%, 膝下丈の小袖丈は, 踝までの小袖丈に対して約75.8%の長さであった(表2③)。

推定膝下着丈AはBに比べて短く(A=95.1cm, B=100cm), 踝丈の小袖に対する割合も小さい(A=72%, B=75.8%)。推定膝下着丈A, Bの踝丈の小袖に対する割合と, 現代の膝下丈の踝丈の小袖に対する割合(74.8%)とを比べると, Bの方が近い値となる。つ

まり、踝丈の通常の小袖と、膝下丈の小袖の身丈の比率から見ると、Bの計算結果の方が自然な丈になると推測される<sup>26</sup>。

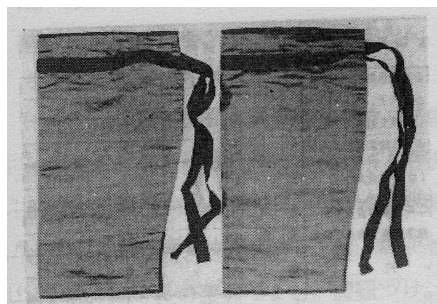


図7 「八代吉宗所用御脚半勝色襦子」  
(図版出典：栗原澄子『被服史からみた御神宝装束の基礎的研究』ブレーン出版，2001年4月，写真14，237頁)

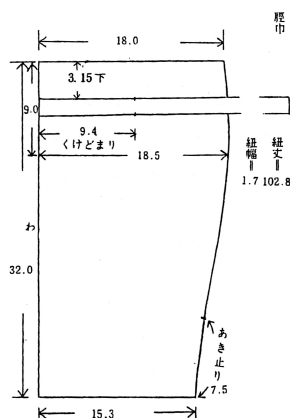


図8 「八代吉宗所用御脚半勝色襦子」寸法図  
(図版出典：栗原澄子『被服史からみた御神宝装束の基礎的研究』ブレーン出版，2001年4月，図6，237頁)

なお、栗原は前述の調査において、江戸時代中期の遺品で、丈は膝丈くらいとされる「六代家宣，御胴着麻中形御紋付御領金襴」「六代家宣，御胴着麻無地浅黄御紋付」の寸法を計測している（表3）<sup>27</sup>。推定膝下着丈A，Bは、同時代の遺品と照らし合わせてともに妥当な寸法であると考えられるが、今回は、踝丈の通常の小袖と、膝下丈の小袖の身丈の比率を考慮し、Bの値を用いて再現製作を進めた。

表4に、江戸時代中期の男物小袖，再現製作(膝下丈の小袖)の原寸および1/7寸法を、前述の標つけ寸法割り出し法とともに示した。また、裁ち切り寸法は、前述の『『きもの』文化の伝承と発信のための教育プログラム』の裁ち切り寸法割り出し法，土井幸代による計算方法<sup>28</sup>を用いた。なお、1/7寸法については後述する。

## 2-2-4 色彩

「御祭礼行列」に記載された常盤町・床几持装束の各色について、色彩の検討過程を示す<sup>29</sup>。「御祭礼行列」の記述から染め分けの技法を特定することはできないが、「張州雑誌」の描写に残された色彩と、日本の伝統的な色彩に関する先行研究を対照させ、おおよその色調を推定する。

表3 参考：江戸時代中期，膝丈小袖の身丈寸法（遺品より）

宝物目録名	所用者	年代	寸法		図版
			場所	(cm)	
六代家宣，御胴着麻中形御紋付御領金襴	徳川家宣	1662～1712	身丈	102.0	写真11，図3 220頁
六代家宣，御胴着麻無地浅黄御紋付			身丈	93.3	写真12，図4 221頁

出典：栗原澄子『被服史からみた御神宝装束の基礎的研究』ブレーン出版，2001年4月，第3章 桃山・江戸時代の衣服の遺品（久能山東照宮博物館収蔵遺品）151～280頁より作成



表4 再現製作寸法表 (単位: cm)

出典	神谷栄子 『日本の美術67 小袖』至文堂, 1971年	薩本弥生(総括) 『『きもの』文化の伝承と発信のための教育プログラム』	再現製作寸法 原寸 膝下丈の小袖	再現寸法 1/7
各部の名称	元禄頃 伝浅倉半蔵 所要小桜小紋小袖実 測寸法*1	標つけ寸法割り出し法*2	*1寸法を基準とし、 計測値のない部位は *2によって割り出し	小数点以下 第2位四捨 五入
袖たけ	46	袖付け+人形(10前後)	46	6.6
袖口	左26.5 右27	袖丈×1/2+2	26.5	3.8
袖つけ	——(全て縫い留め)	身長×1/4-2	46	6.6
袖幅	32	ゆき×1/2+1	32	4.6
着たけ=身丈	132	身長×84/100	100(吉宗の脚絆丈から計算)	14.3
揚げの位置 後	——	袖丈と同寸	46	6.6
揚げの位置 前	左54.5 右55.5 袖下から8.5, 9.5	後ろ位置+4	50	7.1
衿	62	(計測値)	62	8.9
肩幅	30	ゆき-袖幅	30	4.3
衿肩あき	7.75	(固定寸法) 8.5	7.75	1.1
後ろ幅	30	(腰囲-前腰幅)/2+3	30	4.3
前幅	27	前腰幅-衿幅	27	3.9
衿下がり	15	(固定寸法) 21	15	2.1
衿下	立裄 58	着丈×1/2-着丈×1/2-2	42	6.0
衿幅	17	(範囲固定) 腰囲96以下:15	17	2.4
合い裄幅	14.5	(範囲固定) 15~16	14.5	2.1
襟幅	13	5.5~6	13	1.9
人形	なし	(固定寸法) 10	なし	——
衿つけ~袖付け	22.5	——	——	——
内揚げしろ	3.5	——	——	——
揚げ代	3.5×2	裁ち切り身丈-(着丈+くけ代2) (固定寸法) 10	7	1

表5は、長崎盛輝、長崎巖、濱田信義による先行研究に従って、①浅葱色、②柿色、③黒について、マンセル色度記号、RGB値を示し、これに基づいて定めた再現製作でのRGB値を併記したものである。再現製作値の定め方については、後述する。マンセル値は三者とも同一であるが、RGB値には、長崎巖と濱田に違いが見られる。なお、長崎盛輝はRGB値を示していない。また、④白は、木綿を染色、漂白していない素材の色と推測し、RGB値などの検討から除いた。

#### ① 紺(あさぎいろ)

「紺」(「浅葱色」)は、実物の葱より青みがちの浅い緑青色である。平安時代中期以降、誤って同音の「浅黄」の字を当てたことから混乱が起こった。元禄の中頃から宝永・正徳(18世紀初め頃)にかけて流行し、また延享・宝暦の頃(18世紀半ば)にも流行したという。しかし、流行の反面、田舎侍が浅葱色の裏地をつけたことから、「浅黄裏」は「野暮な人間」の代名詞になったとも言われている。「御祭礼行列」の推定景観年代は、流行の

表5 常盤町・床几持装束の色彩

		出典	長崎盛輝*1,2,3	長崎巖*2	濱田信義*3	再現製作値*4
該当の英語名	JIS一般色名	伝統色名	マンセル色度記号	RGB値	RGB値	RGB値
Blue Turquoise	緑みのうすい青	浅葱色	5B 6.5/6.5	000/165/191	51/166/184	51/166/184
Brick Dust	黄みの灰赤	柿渋色 柿色	7.5R 4.5/6	189/120/098	163/94/71	180/105/65
Lump Black	黒	黒色	N1	000/000/000	8/8/8	8/8/8

下記の参考文献、及び試印刷結果より作成

\*1 長崎盛輝 『日本の伝統色—その色名と色調—』 青幻舎, 2008年12月

\*2 長崎巖 (監修) 『日本の伝統色—配色とかさねの事典—』 ナツメ社, 2008年1月

\*3 濱田信義 (編) 『日本の伝統色』 ビエ・ブックス, 2009年9月

\*4 アイロンプリントペーパー EPSON MJTRSP1使用時。

狭間に位置しているが、18世紀前半によく見られた色が採用されていると推測することができる。

## ② 柿色

「柿色」は、柿渋や弁柄で染めた色に由来する色と、柿の実の色に由来する色の二系統がある<sup>30</sup>が、「張州雑誌」の描写に最も近いと思われる柿渋系の色を再現製作色として選定した。なお、江戸時代には「柿渋色」は「柿色」と略して呼ばれることがあり、また「団十郎茶」とも呼ばれる色である。但し、「団十郎茶」は安永・天明（18世紀後半）頃の5代目市川団十郎の人気からとされており、「御祭礼行列」の推定内容年代よりも後のことと考えられるため表に記載しなかった。

## ③ 黒

「くろ」は、一般に、「黒紅梅」（黒紅）、「檳榔子染」、「墨染」などの暗い色を総称するが、正当の「黒」は純黒である。江戸時代から、檳榔子、石榴、または楊梅皮、五倍子、鉄漿を用いて染められ、いわゆる「上黒」といわれるものになり、正式の小袖の色となったという。常盤町の床几持装束に用いられた「黒」は、「御祭礼行列」から染色方法を窺い知ることができないため、今回は暗い色の総称として解釈した。

## ④ 白

「白」は、先述の通り、木綿生地其自然な色と推測した。白木綿は、晒木綿ともいい、生機を灰汁と石灰を遣って煮沸したのち、石臼で搗いて天日晒を反復し、平織に織ったもので、江戸時代初期にはすでにあつた<sup>31</sup>という。対象装束の生地がどの程度まで晒されて「白」になっていたかは推測の範囲を出るものではないが、やや生成色に近い色と推定した。

## 2-2-5 模様

松皮菱（図9）とは、菱形の上下に小さな菱形を重ねた輪郭の模様で、単独にあるいは連続文様として使われるものである<sup>32</sup>。松皮菱については、丹沢巧による幾何学的な三階菱が松皮菱と呼ばれたことの意味を明らかにした論考がある<sup>33</sup>。丹沢は、作庭の書および小袖の区画模様と松皮菱文様の形などから、「松皮菱」の名称と形は室町末期の家紋として記載されているが、突如として単体の松皮菱が現れたわけではなくて、襷文様の変化系

の連続的な形に松の樹皮のずれを重ねて見たことから命名された形である」と結論づけ、「松皮菱文様は日本の造園と関わる形であったと見做」している。

常盤町の床几持装束の模様に松皮菱が付けられた理由は、推測の域を出るものではないが、町名の「常盤」に常盤木の松を掛けて、松皮菱を選んだのではないかと考えられる。

## 2-2-6 紋

紋は、「張州雑志」の描写では明確でないが、背面を見せている一人に、背に石持のように描かれており（図2右から2番目の床几持）、「御祭礼行列」（史料1）に記された「常」の角字は、一つ紋であったと推測される。「常」は、常盤町の頭文字と考えられ、練物従者の装束に与えられた、町名の表示という役割を果たしている<sup>34</sup>。

角字は、文字を四方形に図案化した紋章と考えられる。これは、角字紋（角文字紋とも）呼ばれ、長方形の線で文字をアレンジし、正方形の中に入れたもので、源氏香図に似ており、文字によっては無理に意匠化したものもあり判読困難なものもあるという<sup>35</sup>。

「御祭礼行列」では、角字は紋の書体としてしばしば見られるが（表1）、宮町・竹生嶋車の楯取が付けた「宮」の角字紋を「張州雑志」の描写に確認することができる。（史料2）「御祭礼行列」宮町

㊤竹生嶋（前略）かぢ取八人、衣服細、紋こくもちの中／宮之角字／（後略）

「張州雑志」の描写では、宮町は竹生嶋車から替わった唐子遊車になっており、楯取の装束の色は、「御祭礼行列」記載の浅葱色から薄茶系の色に変わっているが、楯取が着ている装束の背中には、「宮」を四方形に図案化した紋が描かれている（図10）。これは、「以呂波早引紋帳」所載の「宮」の角字（図11）<sup>36</sup>と同様の

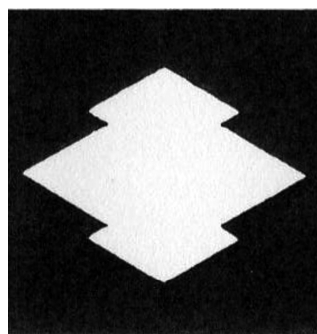


図9 松皮菱  
（図版出典：丹羽基二『日本家紋大事典』新人物往来社、2008年11月、589頁）



図10 宮町・楯取 宮の角字紋装束  
（図版出典：「張州雑志」『新修名古屋市史資料編民俗』2009年5月所収）

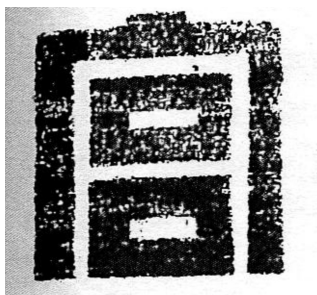


図11 角字紋「宮」  
（図版出典：千鹿野茂『日本家紋総鑑』角川書店、1993年3月、358「宮」2）

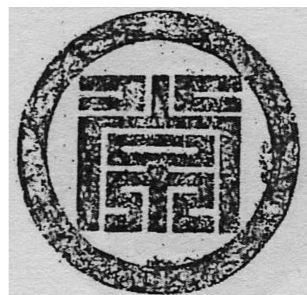


図12 角字紋「常」  
（図版出典：千鹿野茂『日本家紋総鑑』角川書店、1993年3月、109「丸に常」）

紋と思われる。但し、「張州雑志」では石持は無く、角字が単独で紋となっている。

常盤町の紋は、「張州雑志」の描写からその図案を確かめることはできないが、宮町を参考に、今回の再現では「常」の字が四方形に図案化された「丸に常」(図12)<sup>37</sup>から周囲の丸を除いた文字のみを用いた。

### 3. 床几持装束の再現製作方法

#### 3-1 型紙の製作

再現製作作品の大きさは、原寸の1/7の大きさとした(表4)。1/7サイズは、A4用紙に身頃が収まるため、模様配置の効率化という点で扱いやすい大きさといえる。また、国立歴史民俗博物館で実施された人形に装束を着付けた行列展示<sup>38</sup>の例もあるように、集団で着用された装束の着装状態を見せることは祭礼装束のみならず様々な時代の儀式、行列などに伴う衣装や文化を知る手がかりとなりうると考え、装束を並べた際の一見した見やすさと、細部の検討の双方に適した大きさを目指した。

作業には、パソコン(Microsoft PowerPoint2010, Microsoft Paint)と家庭用A4インクジェットプリンタ(EPSON EP-805AW)を使用し、男物長着の印付けの方法に従って、袖、後身頃、前身頃、衿、衿、共衿の型紙を引いた。製作の都合上、縫い代、くけ代はほぼ原寸大としたため、布幅は適宜調整した。

#### 3-2 布地の選定

常盤町の床几持装束の素材は、前述のように「御祭礼行列」には明記されていない(史料1)。しかし、他の練物の床几持の装束で素材が記述されたものは全て木綿が用いられていた(表1)点から類推し、木綿を再現製作に使用した。木綿の生地は、ブロードおよび綿ローン<sup>39</sup>の風合いを検討し、生地が薄手になりすぎないことから、ブロードを選択した。また、生地の色合いは、漂白の度合いが弱い白(TW5500広幅カラーブロード、カラー番号200)とした。

#### 3-3 模様配置と再現製作

1/7サイズで製作した型紙に、パソコン画面上で松皮菱を配置し、彩色して、前述のプリンタを用いて、アイロン転写紙(後述)に印刷した。図13に、模様を配置し、彩色を施した型紙(左側前後の身頃、衿、袖)を示す。

模様の配置は、「張州雑志」に描かれた常盤町(図2)の床几持のうち、袖下が縫われていない人物(図4)を主に参照した。袖口が大袖のようにすべて開いている人物(図4)では、袖布の端まで模様が配置されたことが見て取れるが、袖口が小袖の形に縫われている人物(図3)では、袖の縫い代に相当する部分が見えなくなっている。

色彩は、前述の先行研究によるRGB値とその周辺色のカラーチャートを作成し、アイロン転写紙に試印刷して発色具合を確認し、先行研究に示された色見本と最も近いと思われる色を再現製作RGB値に推定した(表5再現製作値)。

印刷した模様と印付けの線を生地アイロンで転写し、裁断して、単衣の男物長着に準じて縫製を行った<sup>40</sup>。「御祭礼行列」には、単衣とは明記されていないが、裏地についての

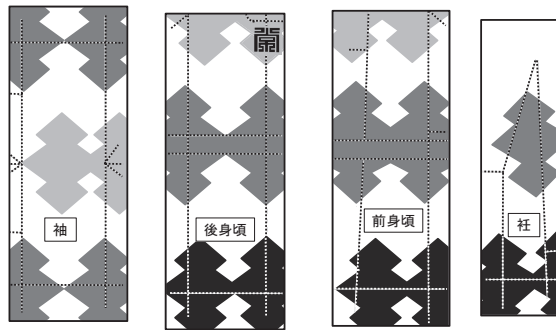


図13 型紙（左側袖，後身頃，前身頃，衿）

記載がないこと，着用季節が夏であることから，単衣と推定した。

#### 4. 結果および考察

完成した再現製作作品を図14に示す。管見の限りでは実物遺品が残っていないため，完全な再現は不可能だったが，「御祭礼行列」と年代の近い絵画資料，実物遺品を参照して，装束の形態，寸法，色彩，模様，紋について検討し，型紙を作成，布地に転写，裁断，縫製した。衿付のラインはやや傾きが大きくなり，衿の端が裾から斜め上に上がったような形となった。これに伴い，前身頃から衿へ模様が連続するよう，松皮菱を少し傾けて調整した。また，内揚げにかかる松皮菱は，仕立て後に自然な連続模様になるよう調整した。肩幅と後幅は同寸で，脇線が直線的である。袖付は人形がないため，袖丈と袖付けが同寸となった。

製作の都合上，作品の寸法に対して縫い代，くけ代が大きくなったため，単衣ではあるが，折り返しの割合が大きくなり厚みが生じる結果となった。縫い代は縫製後に可能な限り裁ち落としたが，くけ代については工夫が必要である。

また，アイロン転写紙の種類は，作品の風合いに大きな影響を与えるものであった。アイロンプリントペーパー 2 種（EPSON MJTRSP1，ELECOM EJP-WPN2）を使用して

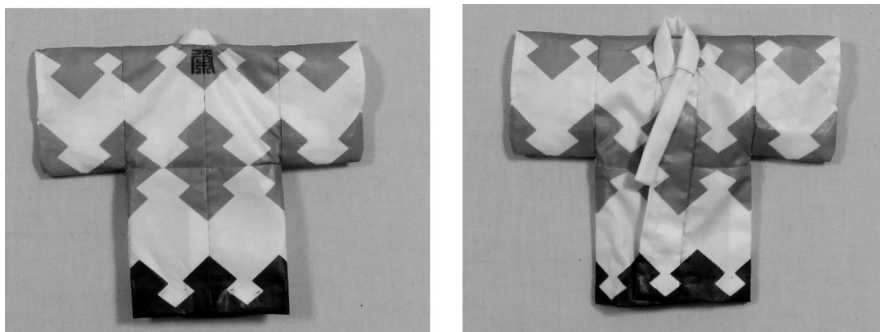


図14 再現製作作品（アイロンプリントペーパー ELECOM EJP-WPN2使用）



同様の製作を行った結果、後者はやや柔らかみのある仕上がりとなり、常盤町の床几持装束では、図2～4から窺われるように着装時の柔らかなたるみが見られるため絵画資料の示す風合いに近いと思われる<sup>41</sup>。生地と同様に、アイロン転写紙の選定は作品に応じた使い分けが重要と考えられる。

## 5. まとめ

「御祭礼行列」記載の名古屋東照宮祭礼装束から、常盤町・虚無僧の床几持装束の再現を1/7サイズで試みた。床几持は、祭礼行列の主な役柄と対になって行列することが多いため人数が多く、練物従者の中でも注目されやすい存在であったと推測され、その装束は、練物従者装束として主要なものと思われる。床几持装束には、様々な色彩が用いられたが、特に、浅黄、柿、黒は「御祭礼行列」に色名として出てくる頻度が高く、常盤町の床几持はこれらの色を白とともにひとつの装束として着用していた。そのため、対象装束を再現することにより、床几持装束に代表的な色彩の検討をすることができ、練物従者として主な役柄と一緒に見物人の目を楽しませた床几持装束の一端を明らかにすることができた。

また、1/7サイズとしたことで、家庭用のパソコンおよびインクジェットプリンタを使用しての型紙製作、模様配置の作業を効率的に行うことができ、かつ細部の検討に耐えうる大きさであった。細かい模様の検討を行う場合には、部分の拡大も必要になるであろうが、大柄模様の形態を明らかにする上で、このサイズは適していたといえる。さらに、市販の人形に着せ付けるのが容易であり、着装時の姿をイメージしやすいという利点を生かし、装束展示への展開も視野に入れることができた。

今後の課題として、今回は無地と思われる色名に準ずるものとして扱った小紋柄の効果について検討を加えたい。また、他の練物従者の装束についても具体的な検討を続け、主な役柄の装束との形態上の差異、色彩などについて染織技法についても考慮し、考察していきたい。

なお、今回用いた製作方法は、長着の印付けの手順で型紙を作成し、模様をパソコン画面上で配置したものを家庭用インクジェットプリンタを用いてアイロン転写紙に印刷し、布地にプリントする、という手順である。パソコンソフトは主にパワーポイント、ペイントを使用し、特別な設備がなくとも独自の模様、色彩を小袖型衣服の模型に展開することが可能である。今回は、小袖型の祭礼装束の再現を行ったが、オリジナル模様の浴衣などを実寸で製作する前段階の試作として、また、着物の形態を学びながら自由に模様を配置する教材として利用できる可能性のある方法を示すことができた。

## 謝辞

本稿を成すにあたり、貴重な資料の閲覧を御許可くださいました、名古屋市蓬左文庫の皆様に感謝申し上げます。

## 文献

- 1 久留島が挙げた事例は、正徳4（1714）年の根津神社祭礼、天保15（1844）年の川越水川神社祭礼である。また、後者の例で「本町人」（家主）が「町人」としての正装をして行列に参加したことが明らかにされている（久留島浩「祭礼の空間構造」（『日本都市史入門Ⅰ空間』東京大学出版会、1989年11月、107～130頁）。
- 2 福原敏男「津八幡宮祭礼の史料と画像—幕末惣町祭礼の一事例」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第98集）2003年3月、135～155頁
- 3 岩崎均史「行列を読む⑥2 江戸天下祭図屏風」（『行列にみる近世—武士と異国と祭礼と—』国立歴史民俗博物館、2012年10月、144～147頁
- 4 福原敏男「行列を読む⑥4 江戸天下祭図屏風」前掲注3、152～155頁、同「行列を織る⑨国芳が描いた江戸山王祭駿河町踊台」前掲注3、202～203頁
- 5 前掲注3、生活に身近なものへの仮装には、例えば蛸、大根、福助などがあるという（八反裕太郎「行列を織る⑩描かれた蝶々踊」204～205頁）。
- 6 福原敏男「祭礼の唐人—朝鮮通信使以前—」（『まつり・祭・津まつり』三重県立美術館、2004年、106～114頁）、同「津八幡宮祭礼を考える—城下町祭礼の視点から—」（『まつり・祭・津まつり展事業記録集』講演会記録）2005年3月、18～29頁
- 7 ロナルド・トビ『「鎖国」という外交』（『日本の歴史』第9巻）小学館、2008年8月、200～204、256～274頁。黒田日出男、ロナルド・トビ『行列と見世物』（朝日百科日本の歴史別冊「歴史を読みなおす」17）朝日新聞社、1994年、52～53頁
- 8 拙稿「祭礼の「唐人」装束—名古屋東照宮祭礼・茶屋町を事例に—」（『服飾美学』第55号）2012年9月、19～36頁。沖本清美・扇澤美千子「祭礼の「唐人」装束 再現の試み—近世後期名古屋東照宮祭礼・茶屋町を事例に—」（『茨城キリスト教大学紀要』第46号）2012年12月、249～262頁
- 9 ①内藤東甫（1728～1788）「張州雑志」尾張国の地誌。巻20～23冊が「名古屋東照宮祭礼図」に充てられている（『名古屋市蓬左文庫蔵 張州雑志』愛知県郷土資料刊行会、1975年6月、『新修名古屋市史資料編民俗』2009年5月、所収）。②尾張藩士高力猿猴庵（1756～1831）・門弟小田切春江（1810～88）「尾張年中行事絵抄」第4・5冊夏の部四月上下（名古屋市蓬左文庫編『名古屋叢書』3編第5巻、1988年3月、所収）。③「名古屋東照宮祭礼図巻」文政4（1821）年以降、『新修名古屋市史資料編民俗』2009年5月、所収）などがある。
- 10 長崎巖『日本の美術435 小袖からきものへ』至文堂、2002年8月、30頁
- 11 現在『人間文化創成科学論叢』（お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科）第16巻に投稿中である。拙稿、予定題目「近世中期名古屋東照宮祭礼の装束—「御祭礼行列」にみる「練物従者」装束の特色と役割—」
- 12 前掲注9①
- 13 また、注記部分にその後の変遷を追記していることが分かりますと指摘されている（名古屋市蓬左文庫展示室2013年6月1日～7月21日、「尾張名古屋の絵師たち—高雅・清を中心に—」「尾張のまつり」展示解説20）。なお、『新修名古屋市史資料編民俗』では、「張州雑志」の景観年代は宝暦明和頃とされている（『新修名古屋市史資料編民俗』2009年5月、解説18頁）。
- 14 『愛知県の地名』（『日本歴史地名体系』第23巻）平凡社、1981年11月、148頁。『名古屋城下お調べ帳』名古屋博物館、2013年3月、城下町名古屋デジタル復元地図ver. 3。現在の地下鉄桜通線久屋大通駅と丸の内駅間で線路をまたぐように町がある。
- 15 なお、杖突が装束に付けている「橘」の紋は、町内の油商・橘屋助九郎（町民の中では知られた者であるという（前掲注14『愛知県の地名』148頁））の頭文字と思われる。装束の紋から町名の表示に加えて、有力な町人の積極的な関与が窺われる。
- 16 神谷栄子『日本の美術67 小袖』至文堂、1971年12月、34頁、40頁
- 17 「薄茶平絹地小桜模様小袖」（江戸時代18世紀、長132.1、衿長62.1、袖長45.4）、画像提供：東京国立博物館。前掲注16第51図解説によると、萌黄地の小桜模様小紋小袖で、朝倉半蔵という元禄ごろ信州に在った（寺の過去帳によって）人が用いたものといわれている。仕立てがうぶで、当時の男物小袖の形態や仕立て方、小紋染を知る上に貴重な資料になっているという。
- 18 前掲注16第37図
- 19 薩本弥生（総括）『「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発—「きもの」の着装体験を含む体験学習と海外への発信』2009～2011年

- 20 河内まき子・持丸正明, 2005 AIST人体寸法データベース, 産業技術総合研究所H16PRO 287
- 21 なお, 2013年青森ねぶた祭で売られている跳ね人の衣装は, 女性用が膝丈で仕立てられており, 身丈は100cmである。
- 22 ①平本嘉助 「江戸時代人の身長と棺の大きさ」(『墓と埋葬と江戸時代』) 吉川弘文館, 2004年8月, 201~223頁。②同 「中世・近世人の身長と埋葬について」(『中近世史研究と考古学』) 岩田書院, 2002年8月, 205~230頁。江戸時代男子平均身長は, 前期155cm, 後期156cmであるという。「御祭礼行列」の景観年代は, 前期に近い155cmを計算値に用いた。
- 23 「八代吉宗所用御脚半勝色襦子」は, 上端から3.15cm下がったところに紐があり, 脛ら脛に結びつける。鎧直垂と袴に付属したものであるという(栗原澄子 『被服史からみた御神宝装束の基礎的研究』 ブレーン出版, 2001年4月, 262頁)。久能山東照宮に伝来する宝物類(第3章桃山・江戸時代の衣服の遺品151~280頁)は, 徳川家康の遺品を始め, 歴代将軍の甲冑・剣などの武器類と, 書画・衣服その他の調度類などである。(衣服の)遺品類は, 製作当時のままで, 後世の補修は全くないから, 日本服装史(縫製史)研究上, 非常に貴重な資料であるという(153頁)。
- 24 前掲注22。なお, 一橋高校内遺跡の埋葬施設には, 江戸の庶民が埋葬されているという。
- 25 なお, 脛骨の長さから膝下丈の小袖丈を算出することも試みたが, 踵の高さを考慮して脛骨の長ささと膝下の長さの関係特定することは困難であり, また資料数も少ないため今後の課題とした。
- 26 Aの計算方法では, 現代人と江戸時代人のプロポーションが同一という前提に立っていることが影響しているのかもしれない。
- 27 「胴着は(中略), 武家使用の衣服のため, 具足下として使用したり, 日常着・労働着(武芸の稽古着)として着用する衣服と考えてよいと思う」ものであり, 久能山東照宮の具足下類は, 丈は膝丈くらいであるという(前掲注23, 228頁)。
- 28 土井幸代 『和裁』 同文書院, 1969年
- 29 主に, 長崎巖(監修)『日本の伝統色—配色とかさねの事典—』 ナツメ社, 2008年1月, 内田広由紀『定本 和の色事典 視覚デザイン研究所, 2008年7月, 長崎盛輝『日本の伝統色—その色名と色調—』 青幻舎, 2008年12月, 濱田信義(編)『日本の伝統色』 ピエ・ブックス, 2009年9月, 丸山伸彦『日本史色彩事典』 吉川弘文館, 2012年5月, を参照した。
- 30 柿の実の色に由来する色名に照柿(黄みのふかい赤)があり, 洗柿, 晒柿(=洒落柿), 薄柿の順で淡くなるという(前掲注29)。
- 31 山脇悌二郎 『事典絹と木綿の江戸時代』 吉川弘文館, 2002年11月, 195頁~197頁
- 32 板倉寿郎ほか(監修)『原色染織大辞典』 淡交社, 1977年6月, 1051~1052頁
- 33 丹沢巧 「文様と造園との接点—松皮菱文様の場合—」(『古来の文様と色彩の研究』) 源流社, 2002年8月, 53~73頁
- 34 前掲注11。なお, 町名表示に用いられた紋は, 書体が明記されている場合, 「角字」の他に「古文字」が用いられた練物もある。
- 35 千鹿野茂 『日本家紋総鑑』 角川書店, 1993年3月, 180~195頁。なお, 角字を楷書と解釈することもできるが, 紋章であることを考慮し, 図案化されたものと推測した。
- 36 前掲注35, 図358「宮」2 195頁
- 37 前掲注35, 図109「丸に常」(徳永氏, 東京寛永寺)を参照した, 185頁。
- 38 前掲注3 図16大名行列人形など
- 39 50番綿ローンが浴衣素材に適しているという(知念葉子, 中山佳子, 服部洋典, 中嶋哲生「産学連携による「学生オリジナル図柄着物」の商品化への試み」(『京都光華女子大学短期大学部研究紀要』第49集) 2011年, 57~67頁)。
- 40 縫製の仕方について, 栗原弘, 河村まちな子 『時代衣裳の縫い方—復元品を中心とした日本伝統衣服の構成技法—』 源流社, 1984年6月を参照した。
- 41 なお, 色彩については, ELECOM EJP-WPN2使用時は, 浅葱色・黒に関してはEPSON紙(表5\*4)とほぼ同様の発色を示したが, 柿色についてはやや明るい色調となったため, RGB値60/85/70付近が適切と思われる。但し, 風合いの違いを確認することを目的として2種類のアイロンプリントペーパーを使用したため, 色彩は表5再現製作値を用いた。

Costume of the Nagoya Toshogu Shrine Festival in the Middle Edo-period  
—A Trial Reproduction of the Kosode-shaped Costume in Tokiwamachi—

Kiyomi Okimoto, Michiko Ougizawa

**Abstract**

It can be interpreted from some of the pictorial materials on rituals that a major type of costume worn by the participants of the Nagoya Toshogu Shrine Festival was the Kosode, common clothing in the early modern period of Japan. Therefore, using the Hosa Library Collection's "Go-Sairei-Gyouretsuo," a historical material on the parade of the Nagoya Toshogu Shrine Festival in the middle edo-period, we focused on the costumes of the parade attendants, which in the past had been given little attention, and attempted to reproduce the Kosode.

We chose the costumes of Shogimochi (a person carrying a portable chair) in Tokiwamachi as the object of reproduction. Because Shogimochi usually appeared in pairs with the main roles, we supposed that Shogimochi dominated the parade as a role that attracted a lot of attention and that its costume was the central costume of the parade attendants. The Shogimochi costume in Tokiwamachi was a Kosode-shaped costume with colors which appear frequently in the "Go-Sairei-Gyouretsuo" as the colors of Shogimochi, namely blue turquoise, brick dust, and lump black. Therefore, we were able to consider the main shape and the colors of Shogimochi costume through this reproduction.

As far as we know, costumes of the Kosode shape in Tokiwamachi have never been found to remain. Therefore, a complete reproduction was impossible. However, we report our process of a trial reproduction in a 1/7 size, conducted referring to pictorial materials and historical clothing ornaments of a closest date for shapes, sizes, colors, designs, and crests of the costumes. Through this reproduction, a taste of the Shogimochi costume was clarified, and the possibilities to exhibit figures adorning the costume were revealed.

